
S e c r e t G i r l

和崎すみれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Secret Girl

【Nコード】

N82730

【作者名】

和崎すみれ

【あらすじ】

蘭が行方不明？英理が、幼いころの蘭そっくり少女・夕里子連れれてきて、「蘭は留学したの。この子は、あなたと別居中の時に作った子どもよ」と何という普段の冷静な英理からあり得ない爆弾発言！

コナンと小五郎は、夕里子が本当に英理の子供か調べて行くうちにコナンがたどり着いた真相とは？

爆弾発言

十一月が終わる頃、見た目小学一年生で大きな黒ぶち眼鏡を掛けた少年が今住んでいる家に急いで帰っていた。いつもは、同じクラスの仲間たちとは「用があるから」という理由に一緒に帰らなかった。

階段を勢いよく掛け上がり、二階の事務所の扉を開いた。そこには、法曹界のクイーンと呼ばれている妃英理の姿がいた。そして、その後ろに隠れるようにして顔を少年の方を見る少女がいた。

「あら、コナン君。お帰りなさい」

「た…ただいま」

コナンと呼ばれた少年は、妃英理の後ろに立っている少女が気になっていた。

現在、行方知らずのこの家に住む毛利蘭の幼いころにそっくりだったからだ。コナンは見た目は子どもの姿で蘭の幼いころを知るはずはないが、実は中身は高校生で幼いころから一緒にいた毛利蘭の幼馴染工藤新一なのだ。トロピカルランドで、黒ずくめの男たちの怪しげな取引現場を目撃してもう一人の黒ずくめの男に殴られ、毒薬を飲まされこの姿になってしまったのだ。

蘭は、コナンが工藤新一だとは知らない。知られそうになっても、必死に誤魔化して来ていた。その理由は、工藤新一が生きていると知られると殺される確率があるからだ。次いでに、周りの人間も殺されてしまう可能性がある。だから、組織が壊滅するまでうっかり話してはいけないのだ。

話を元に戻そう。コナンは英理の後ろに隠れている少女のことを英理に聞く。

「おばさん…この子、誰？ 蘭姉ちゃんに似ているけど…」

「えつとね…この子。夕里子って言うの。夕里子。この子は、居候の江戸川コナン君」

「よ…よろしく」

声までもそっくりだった。コナンは、とりあえず挨拶する。

「僕の名前は、江戸川コナン。訳あって、ここに居候しているんだ。よろしくね。夕里子ちゃん」

満面の笑みを夕里子に見せるコナン。夕里子も英理の後ろから出て来て、ぺこりとお辞儀して自己紹介をする。

「わ、私の名前は妃夕里子。よろしくね。コナン君」

お互いの自己紹介も終わり、英理は小五郎が帰ってくるのを待っている様子だった。コナンは、夕里子を見た。何から何まで蘭にそっくりだった。

コナンはランドセルを置くと、小五郎が帰ってくるのを待った。夕里子に何を話しかける理由もなく、事務所のソファに座った。小五郎は、行方知らずの蘭を探しているのだ。ここ五日間、コナンはインスタントラーメンの食事が続いている。栄養が偏ってはいるものの小五郎が何も作らないのでしょうがないことだった。

「ねえ…おばさん。蘭姉ちゃん、どこにいるか知らないの？」

不意にコナンは、英理に聞いた。

「蘭は留学したの。この子は、小五郎と別居中の時に作った子どもよ」

英理はさりげなく言ったつもり見たいだが、コナンはこの爆弾発言に驚いてしまった。そして、コナンは蘭の行方を追っている小五郎に電話を掛けることにした。頭はかなりパニックになっていたが、とにかくこういうことは小五郎に伝えることが一番と考えたのだ。

「もしもし。おじさん」

「何だ、コナンか」

四回目のコール音で、小五郎が電話に出た。コナンは、夕里子をちらちらと見ながら小五郎に言う。

「あのね……おばさんが、事務所に来ているの小さな女の子連れてね

⋮
⌊

「小さな女の子だあ？」

「それとね……蘭姉ちゃん、留学したんだって。おばさんが」

「何い！ 今から、そっちへ行く。英理に待つて置くように伝えくれ！」

言うが早いが、小五郎は電話を切った。コナンは機械音聞いて、軽いため息をつく。小五郎が帰るまで夕里子と英理に話しかけないことにした。小五郎が帰って来てから、すべてを聞こうと思ったのだ。

「そうそう。コナン君。私、今日からここに住むことにしたから。よろしくね。そろそろ、夕飯を作ろうかしら……」

コナンは、英理のその言葉を聞いてその場で凍ってしまった。英理が作る料理は、独特な色をしたものが多く、味は想像しない方が身のためだった。その事を知っているコナンは、英理が帰るまで博士の家に泊ろうと考えていたが、多分小五郎が許さないだろう。英理が作る独特な色をした料理の負担をコナンまで向けるはずだ。

十分ぐらい経つただろう。小五郎が慌てて歸つて来た。英理の後ろに隠れている夕里子を見ながら、英理に言う。

「このガキは……？ それと、蘭は？」

「蘭は留学したの。この子は、あなたと別居中の時に作った子どもよ」

「ええええええええええええええええええええええええ」

小五郎は目玉が飛び出るくらい驚いた。それは今まで、英理に二人目の子どもがいたことを知らないから当然だった。

「え……待て。それは、お前……浮気……」

「してないわよ」

英理はきつぱりと言う。コナンは、英理の性格上浮気する事は考えられなかったので、夕里子は小五郎の子どもだと考えていた。

「これは、あなたと私の子どもよ。今日から、夕里子と私はここに住みます！ コナン君。夕里子の相手よろしくね。年齢はあなたと一緒に七歳よ。明日は土曜日で休みよね。月曜日から帝丹小学校に転入するから。色々とフォローよろしくね」

英理がコナンに色々と言うと、夕里子をコナンに差し出した。夕里子は驚いた様子だった。

「これから…仲の良い幼馴染になるのね」

英理は微笑みながら言うてきた。コナンは微妙な気持ちで、夕里子を見た。

（もし…このまま、戻れなかったら。こいつと、幼馴染やるのか…）
まだ夕里子の性格はわからない。コナンは蘭の正確に似ていないことだけ祈って、夕里子の相手をすることにした。

「夕里子ちゃん。三階に行つて、お話ししよー」

コナンは思い切りのぶりっこの声で夕里子を誘った。そして、右手を差し出す。夕里子はコナンの差し出された手を握る。コナンは、自宅の三階に夕里子と一緒に向かう。コナンのその短い時間の中で、夕里子に聞く質問を考えていた。学校に転校生が来たら、質問するようにコナンも質問することにした。

三階の自宅に入り、リビングであるちゃぶ台が置いてあるところにコナンと夕里子は向き合う形で座る。これから、一緒に住むことになる相手のことをしっかりと知らないといけない。コナンはそう思つて、質問をすることにした。

質問

「夕里子ちゃんは、何が好きなの？」

「何って？」

コナンの第一声は、それだった。思い切りの子どもっぽい声で聞く。夕里子は、その質問に何を好きなのか聞き返す。

「例えば…色とか、食べ物とかそんな感じ」

「好きな色は、赤」

「じゃあ、僕と一緒にだね」

「えっ…コナン君も、赤好きなの？」

「うん。僕の好きな人…が好きな色だから」

コナンは自分が言ったことに後悔した。夕里子は、ちょっと悲しい様子を見せた。

「そう…なんだ。私も好きな人が好きな色だから、この色好きなんだ」

夕里子は、思いたし笑いしながら続ける。コナンは、その様子を不思議がりながら相槌を打つ。

「でもね…その人、今いないんだ。行方不明なの」

「うん。そうなんだ…。僕も、その人。行方不明なんだ…」

「すごい偶然ね！」

夕里子は満面の笑みを浮かべて嬉しそうに言う。コナンは、幼いころの蘭とダブってしまい、ついつい蘭と呼びそうになるのを抑えながら話を続ける。

「もしかしたら…コナン君が、行方不明のその人だったりして！」

「へっ!？」

コナンは夕里子の存在は今日初めて知った。だから、夕里子が行方不明の好きな人がコナンではないことが分かる。

「冗談よ。冗談。でもね、コナン君が、その人だったら…どんなにいいことか…」

声のトーンが小さくなった夕里子を、コナンはどういう返事をすればいいかわからなかった。それに、夕里子とは初対面なのに以前にもお話しした違和感が抜けない。

「じゃあ、僕がその人の代わりになってあげようか！ 夕里子ちゃん！」

コナンは違和感を吹き払うように、わざと明るく大きな声を出して言うてみた。

「あのね…夕里子ちゃん。僕が好きな人に似ているんだ。色々…」

「わ、私もね。コナン君が私の好きな人に似ているんだ。色々…」

「じゃあ、僕。夕里子ちゃんのこと、呼び捨てにしたい？」

「わ、私もコナン君のこと呼び捨てにしてみてもいいかな？」

二人の間に微妙な空気が流れた。コナンは、夕里子がとても初対面にはとても思えなかった。違和感も中々抜けない。夕里子は、コナンが何か言うのを待ってコナンの顔をじつと見る。コナンも夕里子の顔をじつと見つめる。しかし、お互い顔が赤くなってしまい顔を背けてしまう。

「コナン！」

「夕里子！」

二人はほぼ同時にお互いの名前を呼んだ。夕暮れが差し掛かった部屋で、二人だけの時間。中身が健全な高校生であるコナンは、小さい女の子とはいえ好きな人に似ているので胸がドキドキしてしまう。夕里子も、コナンが好きな人に似ているため胸がバクバクと音を立てている。二人は、お互いの顔をまじまじと見る。顔を赤くしながら。

コナンは、もうこれ以上夕里子の顔を見れなくなり顔を背けてしまった。夕里子もほぼ同時に顔を背けてしまう。それを、陰で英理

が見ていたことも知らずに遠慮がちなながらもコナンは言う。

「本当に、僕が…好きな人に似ているね…」

「私も、コナン君が好きな人に似すぎててびっくりしちゃった!」

夕里子も答えるように言う。そこで英理が割って入って来た。小五郎もちよつとだけ遅れて入る。

「どう仲良くなれた?」

「あ…うん。仲良くなれたかな?」

夕里子は英理に曖昧に答える。コナンは何を言えいいかと考える。しかし、英理はコナンには何も振って来なかった。

「今から、夕飯作るね」

英理が夕飯の事を言った途端に、コナンと小五郎は思考がすべて停止してしまった。夕里子も少しだけ遅れて思考が停止してしまう。英理は台所に向かうと、持ってきた可愛い薔薇柄のエプロンの付け鼻歌を歌い始めながら食料を適当に手を取る。

「おじさん…おばさんを、止めて…」

「ば、バー口お。止められるものなら、止めるけど。鼻歌交じりの英理は本気なんだよ!」

「何の?」

「料理に本気なんだ!」

小五郎のその一言で、コナンは英理の味は想像してはいけない料理を今日は食べないといけなくなると寒気がする。何か理由を付けて、阿笠博士の家に泊ろうと考えてみるものの小五郎はコナンに、自分だけ逃げるなんて考えはなしだぞという顔をしている。コナンは英理の料理を食べることを一秒でも忘れたいため、テレビを付けた。ニュースがやっているチャンネルを付けたが、小五郎が思いだしたようにリモコンを手に持ちチャンネルを切り替えた。ちようど、沖野ヨーコが出ている番組があったのだ。小五郎はだらしのない声で沖野ヨーコの名前を呼ぶ。コナンはそれを横目で見ると、少年漫画

が掲載されている週刊ヨンデーを見る。もうすでに、読み切つていたが少しでも英理の料理のことを忘れたいため読み始める。

料理

「出来たわ」

その英理の一言で小五郎とコナンと夕里子は固まってしまった。

英理は上機嫌な気分で、味を想像してはいけない料理を注いだ食器を持ってきた。小五郎とコナンと夕里子の三人は、英理が作った料理を見た途端に顔が青くなってしまった。

その料理は、とても料理としての色が出来ていなくどうしたらこうなるのかを聞きたくなる程の色合いだった。

「英理。これは…？」

「見て分らない？ ホワイトシチューよ」

その言葉を聞いてその場にいた三人は固まってしまった。英理が作ったホワイトシチューは黒く濁っていて、とてもホワイトシチューですと堂々と言えるものかという具合に出来あがっていた。

「と、とりあえず。食べようじゃねーか。せ、せっかく英理が作ってくれた飯なんだし…」

「そ、そうだね。おじさん」

「い、いただきます」

三人は、スプーンでホワイトシチューをすくう。小五郎は生唾をごくりと飲む。コナンは、冷や汗はかきながらホワイトシチューを見つめる。夕里子も顔を真っ青にしながら、ホワイトシチューを見る。英理は上機嫌でホワイトシチューを食べ始める。

三人は早く食べないと不自然だと思われるので小五郎とコナンは眼を瞑りながら、口を開けホワイトシチューを口に入れる。夕里子もホワイトシチューを口に入れる。そして具をかみ砕きながら、ホワイトシチューの味を確認した。とてもシチューには思えない味だった。小五郎は、早く終わらせたいと思いやけになって食い始めた。コナンも英理に失礼だと思いながら、素早く口の中に入れ早く具を

かみ砕き胃に送る。夕里子もゆっくりながらも、食べている。

「どう？」

英理が不意に聞いてきた。コナンはシチューを食べながら答えた。

「お、美味しいです…」

「そう。よかった」

嘘の方便ということわざがあるが、まさにこういう時のこと言うのだとコナンは改めて思った。それと、蘭の料理がどんなに美味しかったと感じてしまった。早く蘭が、留学から帰って来ないかと思っていた。小五郎も同様、蘭が留学から早く帰って欲しいと願っていた。

「ねえ、おばさん…？」

「何かしら、コナン君」

「蘭姉ちゃん、いつ帰ってくるの？」

その時、夕里子の表情が一瞬変わった気がした。しかし、コナンはそのことに気付かず質問を続ける。

「それと、どこに留学してるの？」

「アメリカよ。いつ帰ってくるかはまだ分からないわ。もしかしたら、一年ぐらい帰ってこれないかも知れないし…」

「えっ…」

小五郎とコナンは固まってしまった。これから一年間、英理の料理を食べていけないとなるとかなりの味覚音痴になりそうで怖くなくなってしまった。

同居

英理の料理と呼べない料理を食べ終わった小五郎は、英理に向かって夕里子のことについて聞いた。

「なあ、英理。この夕里子は、本当に俺とお前の子供なのか？」

英理は、食器洗いをしていた。夕里子とコナンは、テレビのバラエティーを見ていた。小五郎が好きな沖野ヨーコは出ていなく、最近流行りのアイドルグループが出ていた。

「…ええ。そうよ。さつきから、何度も言ってるじゃない」

「それならそうと、生まれた時にどうして俺に言ってくれないんだ！？」

「……あなたが、頼りないからに決まっているでしょ」

英理が答えるのに少々、間があった。その間に、意味があったのだが小五郎はそれに気付くことはなかった。英理は、食器洗いを終えると小五郎の目の前に座った。そして、重要な話を切り出した。

「夕里子のこともあるし、お互いよりを戻そうと思わない？」

小五郎は、突然の英理の態度に戸惑った。しかし、断る理由はどこにもなかった。

「…ああ。そうだな。そろそろ、戻そう。蘭も喜ぶだろうし」

小五郎は、そういうと立ちあがった。

「英理。俺は、これから浮気調査をしないとイケないんだ。実は、依頼があつてな。一晩帰れない。コナンを頼むな」

「ええ。わかったわ」

小五郎が家を出て行くと、英理は夕里子に向かって意味深な発言をした。

「よかったわね。七夕の願いかなったわね」

夕里子は、英理の方を向いて立ちあがると意味深な発言に返した。

「やっと叶った。ずっとずっと、待ってた…」

夕里子が涙を流し始めた。コナンには、この親子のが会話が謎だった。理由は、夕里子の七夕の願いと、夕里子の言葉。そして、涙だ。

小五郎の様子を見ると、夕里子と小五郎は初対面。それなのに、ずっと待っていたとはどういう意味なのだろうか。

コナンは、夕里子について、調べたくなった。本当に、英理の子供かどうかを調べる。しかし、コナンの姿では限界があると知っていたため、小五郎に協力を仰ぐかと考えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8273o/>

Secret Girl

2011年5月5日18時55分発行